

---

# 万華鏡

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

万華鏡

### 【Nコード】

N4527U

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

倒産寸前の叔父の会社の資金援助をしてもらうのが目的で、叔父に頼み込まれ、同じ年の従姉妹の身代わり花嫁として、ターゲットの社長宅に行かされる事になりました。相手は冷酷な感じの独身主義の実業家……。誘惑してその気にさせて欲しいなんて！飛んでもない事を言われ……。お付き合いした人も居ないし、まだ本当の恋も知らない私なのに……。《フォレストより引越して来た作品です》

## 第1話 身代わり花嫁

万華鏡って知ってる？

筒の中に鏡を張って合わせ鏡にして

クルリと回すと

美しい硝子玉やビーズが素敵な模様を描くの・・・。

光に翳して、グルグル回すと夢のよう・・・。

お金持ちで何不自由ない暮らしの大門寺有里亜・・・。

両親がいなくて貧乏な暮らしの錦織真里奈・・・。

同じ年の従姉妹同士だからか、二人は良く似ていた・・・。

そして万華鏡のようにクルリと回して入れ替わった・・・。

\* \* \* \* \*

・・・中学2年の時に家が火事になって、祖父と両親と弟が亡くな  
ってしまった。

隣家空き家に放火され、そのもらい火によって家が全焼してしまっ  
たのが原因・・・。

深夜で家族全員熟睡してて、逃げ遅れてしまった・・・。

私は1泊の校外学習で家を空けていて助かった・・・。

明るく笑いの絶えない、楽しい家族だった・・・。

私は突然、独りぼっちになってしまった。

私はお金持ちの叔父（父の弟）家に引き取られて、高校卒業までお世話になった。

叔父は優しい人だったが、叔父の妻であるおばさんは冷たい人だった・・・。

そして一人娘の私と同じ年の有里亜ゆりあも我が儘で、いつもふり回されて何度も泣かされた・・・。

だけど大変お世話になってるから、いつも我慢した。

最近叔父の会社が経営難で危ない状況になってしまい、救済してくれそうな企業の社長との縁談話が急浮上した。

有里亜は嫌がり、私が身代わりになるように頼まれて、身代わり花嫁として嫁ぐ事になった・・・。

嫁ぐと言っても入籍の予定は今の所ない・・・。

社長は独身主義らしく結婚する気はなかったが、叔父が一生懸命娘との縁談話を持ち込んで、会社の資金援助を申し出た為、そんなに言うのならと、とりあえず社長宅に寄越すようにと言われたのだ・・・。

その社長宅に行つて、身の回りのお世話などをして、社長のお眼鏡にとまるように・・・。

おじの会社の資金援助をスムーズに運べるようにする事が目的。

いつもは温厚な叔父が、社長のハートを射止める様に頑張っ  
て欲しいと頼み込んで来た。

そんな事私には無理・・・だって、恋愛した事もないし、男性と  
付き合をした事もないんだから・・・。

泣く泣く私は今日から社長宅に行く事になった。

社長の名前は、かしのはら ひろひで 榎乃原裕英 31歳。

中央区佃島の高級マンション40階に住んでいて、隙がなく、と  
ても頭が切れて、やり手の経営者で、見た目は冷たくて恐そうな人  
らしい・・・。

凄く恐くて嫌だけど、中2から叔父の家ですっとお世話になっ  
てき、高校まで出してもらった。嫌ですなんてとも言えない。

名前は本名の真里奈まじなで構わないと言われた。

独身主義だから、婚姻届けを出す事はないだろうと・・・。  
会社が持ち直すまで我慢して欲しいと叔父から言われた。

もし、社長がお前の事を気に入ったら、夜の相手もしてあげて欲  
しいとまで言われた。

そんなの嫌だわ!! 経験ないし・・・どうしたら良いの?!

震える指でインターホンを押した。

恐ろしさで喉が乾いてくる・・・一度ゴクリと生唾を飲み込んだ。  
留守でありますように・・・と内心思ったが、その期待は裏切られ  
て、暫くしたらガチャリとドアが開いた。

「あの・・・大門寺の家の娘です」

恐くて作り笑いが引きつる。

「ああ．．．入って．．．」  
無表情でめんど臭そうな様子の裕英。

大つきい！！って思えるぐらい背が高く（187cmぐらいある？）、整った綺麗な顔立ちをしてるけれど、目が鋭くて恐そう．．．  
。隙のない、頭の切れる感じがする。

「はい．．．おじやまします」  
恐る恐る玄関に靴を揃えて、家に入った。

無言でクルッと背を向けてスタスタ行ってしまう裕英の後を慌てて追いかけて、ついに行ったら30畳ほどのリビングダイニングに通された。

天井からはまばゆい上品で豪華なシャンデリアが下がっていて、高価そうな家具やら、ソファーセットやら、大理石のダイニングテーブルやら．．．今まで見た事のないような素晴らしい美しいお部屋に、一面ガラス張りの窓からは、隅田川と美しい東京のビル群が広がる大パノラマの眺望が広がる。

桁外れの世界にいきなり飛び込んだ感じで、ボーンとしてしまった。

「かけて」

手でソファーに座るように合図されて、ハッと我に返り、慌てて指された椅子に座った。

「で．．．名前は？」

「はい。真里奈と申します」

「年は？」

「20歳です」

「仕事の経験は？」

「はい。父の会社の事務を手伝っておりました」  
矢継ぎ早に質問攻めにあう・・・。  
なんだか質問の内容が、就職の時の面接みたいって思った。

「へえー。社長令嬢が働いてたんだ」

働いていたという事にとっても興味を引いた様子で、初めてにやりと口元が笑った。

その笑い方が、ちょっと怖い・・・。

「はい・・・」

働いちや悪いか!! って思った。  
しかも給料タダよ・・・。

「で・・・何してくれるの？」

「は？」

「君の父親からどうしてもって言われて家に置く事にしたんだが・・・  
何をしてくれるのかな？」

「料理・洗濯・掃除何でもします」

「じゃあ家政婦として来た訳・・・」  
凄く不満そうな表情に変わった・・・。

「そう言うわけじゃあ・・・」

何を言わせたいのか？　なんだか怖い・・・。

「つまらないね・・・」

益々不機嫌そうな顔に変わった・・・。

「言つて下さればなんでもします」

必死になって飛んでもない事を今言っちゃったかも？

「なんでも？」

ニヤリと企んだような笑を浮かべられてドキツとした。  
うわあ〜この人格悪そう。。。怖い。。。。

「時と場合によりますが・・・」

慌てて訂正した。

「ふーん。役に立たないなら、追い出すよ・・・」

「・・・そ・・・そんなあ〜」

でも、無理難題な事を強要されるのは困るし・・・。

「な・・・何がお望みなんですか？」

「そうだね・・・家の事も勿論頼みたいけど、社長業も疲れるから、  
疲れがとれるように癒してもらいたいね・・・」

「じゃあがんばります。肩もみでも何でも・・・」

「そう・・・じゃあ早速もみほぐしてもらおうかな？」

「はい」

「じゃあ、ベッドルームでね．．．」

「えっ？」

「なに？」

「ああ．．．いいえ．．．。」  
「うそおーっ。まさか．．．私の体を?!」  
ど．．．どどど．．．どうしよう．．．。」

裕英はスタスタとベッドルームに行くので、慌てて付いて行った。  
真里奈は極度の緊張感と、恐怖心とで、手足が同時に動いて非常に不自然な歩き方をしていた。  
そして裕英は広いベッドにゴロリとうつぶせに寝ころんだ。

「じゃあ頼むよ」

「はい」

真里奈は何処を揉めば良いのか一瞬考えたが、やっぱり肩よねと思  
い、肩揉みをし始めた。

知らない男性の体を触るのなんて初めてだったので、ドギマギした  
．．．。

『なんか．．．筋肉質でやたらと固い．．．手が疲れる．．．』  
男の人の体って、こんなにガツチリしてて固いの？

「肩揉みもいいんだけどさ．．．ここもこっってるんだけど．．．」  
裕英はゴロリと上向きになり、真里奈がとても触れる事の出来る場  
所ではない所を指差した．．．。」

嘘でしょーっ！！！

「ええっ？」

そんな所．．．どうして良いのか分からなくて固まってしまった。

「揉んでよ．．．」

「．．．」

「嫌なの？」

「．．．」

「早く！ こってるんだけど．．．」  
だんだん声がイラついて来た様にも聞えて来た。

．．．神様仏様．．．。

意を決して揉もうとした時だった．．．。

「あーっはははは．．．」

いきなり大笑いし始めた。

涙を流しながら、お腹を抱えて大笑いしている．．．。

この人こんな大声で笑うんだ．．．。

「君って面白い子だね．．．」

その時に気がついた．．．。

『うそー！！ からかわれたんだ．．．』

物凄いショックを受けた．．．。

あまりのショックに腰が抜けて、その場にへたり込んだ。

「もう！！酷いじゃありませんか！！」

「いやーあ。面白い．．．愉快、愉快．．．。気に入ったよ!!」  
涙をぬぐいながら、まだ笑ってる裕英。

「私をからかって遊んでるのですか？」  
ブーツと膨れ顔になった真里奈。

「だって、子供っぽくて見た目今一つだし、からかって楽しむぐら  
いしか役立ちそうにないしね．．．」

「私、家事得意なんですよ!!」

「まあそれも頑張ってる!!」

「頑張りますっ!!」

「ああ．．．それから、今日から一緒にベッドで寝てもらおうから  
」。

『ええーっ!! そんなあ．．．』  
いきなりそんな事言われて唖然としてしまった．．．。

「なに？ 嫌なの？ 君のお父さんは、どうぞお好きになってよ  
こしたんだけど．．．」

「父の会社の援助をして下さるのなら．．．」

「それは今後の君の働き次第だね．．．」

「わ．．．わかりましたっ」

「それから、ジャージとか色気のないナイトウェアはバツだからね  
」

うっ．．．。読まれてると思った．．．。

高校の時のジャージで色気なくせばって企んでただけど．．．。

「は．．．い．．．」  
シユンとする真里奈。

．．．そして、夜がやって来て．．．寝る時間がやって来て．．．。  
白いフリルたっぷりフェミニンなネグリジェを着てベッドにやっ  
て来た。

裕英は上から下までじーっと見て、

「ふーん。なんか子供っぽいなあ．．．。もっとセクシーなの着て  
欲しかったな．．．。まっいいっか．．．。早くおいで．．．」

「はい．．．」

私．．．耐えられないかも．．．死にたい気持ちになって来たわ．．  
。

ベッドに入ったら、いきなり裕英が覆いかぶさって抱きついてきた。

ひえーっ！！と思った。

「うーん。まあまあかな．．．。この抱き枕は」

だ．．．抱き枕？！

「はあ？」

「今晚からあんたは抱き枕ね」

そう言つて裕英は、真里奈に抱きついてそのまま寝てしまった．．．

．．．私．．．抱き枕なわけ？

そして、裕英がボソツと耳元でささやいた。

「俺は好きな女しか抱かないから．．．あんたの父親の資金援助狙つてるんなら、俺があんたに惚れるように、俺の心奪つて見せてよ」

．．．うーん。タダ者ではないと思つたけれど．．．。

ホツとした反面、大変な事になつたなと思つた．．．。

．．．この感触が1番いいと、いつも真里奈の背後から裕英が抱きつく姿勢で寝るのが日課になった。

だが．．．。

「．．．．．」

「うわっ」

「ぎゃっ」

「ひゃっ」

「ひっ」

時タイタズラな手がお触りしてきて、真里奈は落ち着いて寝れない．．．。

それに、いくら襲われないといつても、男性とひとつベッドの中で

寝るなんて．．．。ありえない．．．。

「いちいちうるさいな！！この抱き枕は．．．」

「もうっ．．．好きな女しか抱かないって言ったのは、裕英さんじゃないですか！！」

ペタペタと触られて、落ち着いて寝れません！！」

「男がなにもしないで大人しく寝ると思うのが間違いだよ！！」

お前は俺を癒す為に父親がどうぞと送ってきたんだから、襲わない変わりに、ちょっと触るぐらいで騒ぐな！！」

．．．もう勘弁して欲しい．．．私やつれて死んじゃうかも．．．。

（第2話に続く）

## 第2話 意地悪社長

裕英さんとの生活は、疲れる．．．。  
夜は抱き枕として、お触りされながら我慢しなくてはいけないし．．．。

昼間は、家事と第一秘書として会社勤務も命じられて、9時から5時まで社長室で働いている。

「枕！！これを10部コピー頼む」

「はい」

しかも．．．私の事を『枕』って呼ぶから、恥ずかしい．．．恥ずかすぎる．．．。

『枕』の由来は、裕英さんの抱き枕だから．．．。

社長室にいる社員は、側近中の側近だから、私が父の会社の資金援助を頼み込む為に、送られて来た者だって事を知られてる。

『枕』と呼ばれる由来も．．．。多分．．．。  
きっと回りの社員の人達は、社長の愛人だって思ってると思う．．．。

視線が突き刺さる．．．辛い！！

いつも社長から、物凄く馬鹿にされて、もて遊ばれて、からかわれて．．．。

悔しい！！メチャクチャ悔しい．．．。  
だけど．．．叔父を助ける為に頑張らないと．．．。

「きゃっ!!」

社長は会社でも人の目を盗んでは、お尻や胸にさりげなくタッチしてくる……。

「そんな大きな声あげると皆に気がつかれるよ。」  
ウインクしながら意地悪そうな笑を浮かべる裕英。

うとうつ……悔しい!!

我慢 我慢……。

でもこんな意地悪で、冷たそうな人の心を虜にさせるなんて……  
私には無理そう。

会社から帰って、洗濯物をしまい、掃除をして、夕食の支度をしている時に携帯の着信音が鳴り、出てみたら叔父からだった。

「真里奈……どうだい、社長との生活は……。援助してくれそうかい？」

「叔父さん!! 全然相手にされてないと言うか、おちよくられるだけで全然だめです。もう家に帰りたいです」

「こらっ!何を言ってる!! 真里奈が頑張ってくれないと、家族全員首をくくらなくてはいけなくなるんだぞ!!」

家族どころか、社員の家族の生活もかかっているんだからな。まあ、頑張ってくれ!!

今日はセクシーな服でも着て、夜迫ってみなさい!!それじゃあな」

「あつ。ちよつと……。叔父さん……」

言いたい事だけ言って電話がアツサリと切れた。

「叔父さん．．．自分の娘だったらこんな薄情な事言ってくる？  
こんな事している私を見たら、天国の父さんはどう思うだろう．．．  
」  
高校まで行かせてもらった事にはとても感謝しているが、それでも  
叔母や従姉妹の有里亜に意地悪されて、どれだけ我慢して来た事が  
．．．。なんだか馬鹿らしくなってきたな．．．。  
高校卒業して、ご恩返し of 気持ちで、叔父さんの会社に3年間タダ  
働きして来たし．．．。

「もう．．．蒸発しちゃおうかな．．．」

「何だって!!！」  
いきなりぬつと裕英が現れた。

「きゃっ!!！」  
ビックリして飛び上がった。

「なんだ男と駆け落ちの約束の電話か？」

「違います、父からです」

「在り来たりな言い訳だ．．．」

「本当です」

「電話を切った後、蒸発すると言ってただろう．．．」

「裕英さんがいつも虐めるから、ふと言ってみただけです」

「ふーん」

「ほら．．．その証拠に着信に『叔父』って書いてあるでしょう?」

「叔父?」

「あ．．．ふざけて父の事『叔父』って呼んでるんですよ。  
ほら番号．．．実家の番号でしょ?」

「まあね．．．でも俺が虐めるだなんて!! 人間きの悪い!!  
あんたが無理矢理ここにいる様なものだろう．．．」

「はい．．．すみませんでした」

私だつて居たくて居るんじゃないのにつて思った．．．

「まあいい」

「夕食の支度出来ましたが．．．食べますか?」

「いや．．．先に風呂に入る」

「はい．．．」

「枕! 背中を流せ」

「はい．．．え?．．．ええーっ」

油断していると、裕英さんは突然突拍子もない事を言いだし、私はその一言に翻弄される．．．。

そして『ノー』の一言がいつも言えない．．．。

「早く来い!」

「は．．．はい」  
嘘でしょう．．．。

「来い！」と言われて、広いバスルームの脱衣室についてて行き．．．  
。裕英さんがいきなり服を脱ぎ始め、「きゃっ！」と思って、クルリと後ろを向いた。

「おい！早く背中を流せ！！」

恐る恐る振り返ったら、裕英さんはすでにバスルームにいてバスチェアに座ってた。  
丁度背中を向けていたから、ホツとした。

「力を入れて磨けよ！！」

「は．．．はいっ」

ボディスポンジにボディソープを付けて、裕英さんの広い筋肉質な背中をゴシゴシ磨いた。

『肩幅広い．．．引き締まった綺麗な体．．．』

「おい！枕！！俺の体に見惚れてるの？」

そう言われて、ハツとした。

「そ．．．そんなことありません」

「なに魅力がないって？」

「そうじゃありませんけど．．．」

「お前が裸になって、お前の体で磨いてよ．．．」

「ええええーっ」

驚いて、目が点になった。

「あはははは．．．ウソウソ．．．。 枕の目が点になった。  
ご苦労．．．。 すぐ行くから食事を並べといてくれ」

「は．．．はい」

悔しい！！ またおちよくられた。

でも．．．さっきの後ろ姿の裕英の裸体が目に焼き付いてしまつて  
離れなかった．．．。

綺麗な体してたなあ．．．って．．．。 私何考えてるの！！  
何か心臓ドキドキしてきた．．．。

テーブルの上に夕食を並べてたら、リラックスウェアに着替えて  
石鹸の香りをさせてる裕英がやってきた。

「へえ、今日のご飯も美味しそうだな．．．」

「どうぞ沢山食べて下さい」

「真里奈は社長令嬢の割に家事は何でもこなせるし、令嬢っぽくないねー」

「これは私の趣味です．．．」

「家事が趣味なの？」

「はい」

本当は、叔母にこき使われて毎日やらされてて上手くなっただけ  
れどね……。

「今までずっと外食ばかりの生活だったから、家庭料理を食べ  
るのありがたいよ」

「こんな私でもお役に立つ事が出来て嬉しいです」

「いや……かなり役立つてるよー!」

「本当ですか?」

「まあ、お世辞も多いけどね」

ちえっ……。油断して喜ぶとすぐに凹ませられる……。  
可愛くないなあー。

「あ……今俺の事可愛くねーって思ったでしょ?」

「そんな事……あります」

「え?」

「いつも虐められてばかりだから、お返しです」

「ははは……枕もけっこうやるな。」

俺さ、ずっと一人暮らしが長かったから、こっやって話しながら家  
庭料理を食べるのもいいなあって思うよ」

「私も、お喋りしながら夕食ってかなり久しぶりで・・・」

「えっ?」

裕英の顔が急に真面目になり、驚いた顔をした。

アチャーしまった・・・。口がすべった。

実は、大門家では私は一緒にテーブルでは食事させてもらえなくて、いつもキッチンの調理台の所で一人でポツンと食事してたのよね。

「ほ・・・ほら・・・うちの父は仕事忙しかったし・・・母も出かける事が多くて、私いつも1人で食事が多かったんですよ。だから久しぶり・・・ハハハ・・・」  
ちよつとしどろもどろになったが、慌てて訂正した。

「へえーそうなんだ。君も結構可愛そうな子なんだね」

「そうですよ。だからあまり虐めないで下さいね」

「うん。なるべくね」

「なるべくですかー?」

「だってさ、枕をからかうのが俺の癒しでもあり、楽しみでもあるからさ・・・」

「ちえっ!?!」

「まあ、お前の事気に入ったよ」

「じゃあ早く、父を助けてあげて下さい」

「図に乗るんじゃないよ！ 何十億、何百億って金が動くんだから、そう安々とどうぞって言う訳にもいかないんだからね」

「まあ、それもそうですが．．．」  
確かにそう思う．．．。

資金回収出来るかも分からない傾いた会社に、普通ホイホイって気安く援助しないよね。

じゃあ私のやってる事って無駄なのかも．．．。

叔父はいい人だけど、気が弱くて経営者としてウーンと思う事も多いし．．．。

叔父の仕事を手伝ってて、ちよつとね．．．。と思う事も多かった。その事を思えば、裕英さんの様なやり手の企業家だったら、叔父に投資しても大して見込みがない事はすぐ分かるだろう．．．。

大体色仕掛けで資金援助を狙うと言う事自体が、発想が貧しいと言うか、そんな事で折れるようにも思えない．．．。  
裕英さんはそんな単純な人ではないと思う．．．。  
結局一銭も出してもらえずにその内追い返されるのは目に見えてる．．．。

「．．．ら．．．枕．．．」

「あつ、は．．．はい」

「急に黙りこくってしまったって何考えてるの？」

「正直に言つと．．．ちよつと馬鹿らしくなって．．．」

「えっ？」

「裕英さんみたいなやり手の企業家の人に、こんな小細工しても投資してくれるとも思えませんし．．．。父の魂胆なんて見え見えですよね？」

「枕は父親に似てなくて、頭の回転が早いよな．．．。良く分かってるよ」

「実はもうあほらしくてこんな事終わりにしたいなって．．．」  
そう言つて、裕英さんの顔を見たら淋しそうに見えた。

「君の父の事抜きで、このまま付き合えたらって思ってるんだけどね．．．」

「えっ？」

「初めはゲーム感覚で、からかってそのうち追い返そうと思ってたんだが．．．一緒に過ごしている内に情が移ってしまつてね．．．」

「裕英さん．．．」

「あ．．．本心バラしちゃったね。

君はなかなか魅力的な女性だよ．．．」

いつも意地悪そうな笑を浮かべて、からかわれまくっているのに、真面目顔の裕英さんに、真里奈の心はドギマキした。

(第3話に続く)

### 第3話 初めての夜

裕英さんから真顔で『魅力的な女性』だなんて言われて、真里奈は心が高鳴った……。でも……。

「もしかして……また私をからかって楽しんでるのではありませんか？」

「うーん。真面目に言ったのに……」  
ガツクリと肩を落とす裕英。

「えーっ」  
口に手を当てて、真っ赤になって驚く真里奈。

「でも悪いけど、君の親父さんの事は、助けてあげられないと思う……」

「私も無理な頼みだと言う事は分かってました」

「勝手な頼みだけれど、君の父親の事抜きで、このままここにいてくれたら嬉しく思うんだけど……」

真里奈はあれこれ思った。

このままここを出ていくのは淋しすぎる……。  
大門家ではいつも浮いた存在で、居場所がなかった……。  
ここは居心地が良すぎる……。裕英さんと居ると楽しい……。

「私も、裕英さんと居ると楽しいです」

「じゃあここに居てくれるかい？」

「はい．．．」

「君の父親の事だけど．．．方が一の時には、生活に困らない程度の支援はしてあげたいと思ってる」

「ありがとうございます」

「心の内を話してしまったから、もう抱き枕は無理だね？」

「えっ？」

「ベッドを共にしたら、君を襲ってしまいそうだから．．．」

今日からゲストルームの寝室を使う事になった。

広い部屋の広いベッドにゴロンと横になる．．．。

もうお触りされる心配もないし、一人で寝れるようになればパラダイス．．．って前は思ったけれど、今は淋しい．．．。

寝つけなくてゴロゴロ右に左に転がるけれど、全然寝つけない．．．。

時計を見たら深夜1時．．．。

裕英さんはもう寝ちゃったでしょうね．．．。

あまりにも寝れなくて、水を一杯飲もうと思い、キッチンに行った。小さな蛍光灯だけつけて、ぼんやり薄暗いキッチン．．．。コップに水を入れて、ゴクゴクツと飲んでため息をひとつ吐いた．．．。

その時力チャリと裕英さんの寝室の扉が開いて、裕英さんが出てきた。扉が開いた時に部屋が光々としていたので、眠れなかったんだなと思った。

「あれ．．．まだ起きていたの？」

「はい．．．なんだか寝れなくて．．．」

「俺もすっかり抱き枕の虜になちゃって．．．いないとなんか物足りないと言うか．．．淋しくてね．．．」  
そう言つて、頭をポリポリと照れながら掻いた。

「実は．．．私も．．．」

「えっ？」

「一緒に寝ても良いですか？」

その一言に裕英は驚いて、大きく目を見開いて頬を紅潮させた。

「でも．．．君をおそつちやうかも．．．」

「でも．．．1人は寂しいです」

「いいのかい？」

真里奈はコックリうなずいた。

裕英は真里奈を抱き上げて、寝室に連れて行った。

そして優しくベッドの上に寝かせた。

「恐くないの？」

「ちょっと恐れけど・・・あなたが好き・・・」

「真里奈・・・」

裕英は真里奈の上に覆いかぶさり、ふわりと抱きしめた。

「キスしてもいいかい？」

「はい・・・」

裕英がキスしようとした時、真里奈はハッと思い出した。

「あ・・・待って!!」

「恐くなった？」

「じゃなくて・・・私、あなたに嘘ついてました」

「え？」

「私、大門寺の娘じゃなくて、父と言ってる人は実は叔父なんです。ごめんなさい。あなたを騙したまま、愛し合ったり出来ない・・・」

「なんかおかしいなとは思ってたんだ。娘を売り渡すみたいに俺の所によこすなんて・・・それに裕福な家庭のお嬢様っぽくないと思っただし・・・」

「私の事、嫌いになりましたよね？ あなたを騙して・・・」

「正直に話してくれて嬉しいよ。聞かせてよ、君の事」

真里奈は自分の生い立ちや、今までの事などを全て話した。

話し終えて、真里奈が裕英に不安そうな顔で言った。

「とても驚きましたよね？」

真里奈の横でゴロリと寝て、肘枕をつきながら裕英が答えた。

「何となく感じてたんだ・・・なんか訳ありっぽいなってね。だから打ち明けてくれて凄く嬉しいし、ホッとしたよ」

「嫌いになりませんか？」

「全然！ 益々好きになったよ」

「嬉しいです」

「そんな目にあってるんだから、叔父さんの事であれこれ悩む必要はないと思うよ」

「はい・・・」

「これからは自分の幸せを優先させたほうが良いよ。

こう言っても、君は人が良さそうだから、叔父さんの事まだ心配だ  
と思うけど・・・」

「姪を売り飛ばすような事をする叔父さんは、酷いと思うよ」

「はい．．．」

「じゃあもう、なにも問題ないよね？」

「はい．．．」

\* \* \* \* \*

本当に恋人同士として初めてむかえる朝．．．。

裕英さんは独身主義との事だから、結婚は望めないと思うけど．．．  
。 だけど．．．心は満たされて、幸せだと感じた。

ずっと愛に飢えていた．．．。自分の事を愛してくれる人が欲しかった．．．。  
だから．．．そんな高望みはしなくてもいい．．．。

もしかしたら．．．裕英さんの心が変わって、他の人を好きになつて、別れの時がやって来るかもしれない．．．。  
だから、2人で過ごした楽しい時間を．．．心の中のアルバムに、  
忘れないように書き記しておこう．．．。  
楽しい事だけを．．．。

「真里奈．．．」

裕英の腕に頬をうずめ抱かれながらぼんやりとあれこれ考えていたら、愛しい人の声がしたので、ふと見上げたら、優しく愛おしげに裕英が微笑んでる顔が見えた。

いつもの意地悪そうな顔ではなくて、とっっても柔らかな表情．．．。

「結婚して欲しい．．．」

ポツリと言われた言葉に、非常に驚いた．．．。

「えっ？」

「俺と結婚してくれないかい？」

「裕英さん、独身主義だつて聞いてたから、結婚は諦めていたのに．．．」

「まさか！！ ただ結婚したいって思える女性がいなくてさ、出会えなかつたらずっと1人でも良いかなって思っていただけ．．．。俺の奥さんになるのは嫌かな？」

「いいえ．．．。とても嬉しいです」

「じゃあ、結婚しよう」

「はい」

．．．．朝食の時．．．裕英さんから指輪を渡された。

「これは？」

「これは、俺が幼少の頃に亡くなった母親の形見の指輪なんだ。母は、親父の母である、俺の祖母から貰ったらしい．．．。樫乃原家に伝わる指輪で、婚約指輪にと思ってね．．．。」

．．．．アンティークな感じのデザインの綺麗な赤いルビーの指

輪・・・回りに小粒のダイヤが品良く主張しすぎない程度にちりばめられている。

「嬉しいです」

「はめてあげるね」

指輪はサイズがぴたりで、朝日に反射してキラキラと赤く美しく輝いた。

「凄く似合ってる・・・」

「裕英さんのお父様、結婚許してくれるでしょうか？」

「家は放任主義で俺の決めた人ならだれでも良いって感じだから、心配しなくても大丈夫だよ」

「良かった・・・」

「でも、問題は君の叔父さんだね・・・」

「気が重いですけど・・・融資の件は諦めてもらうように話してみます」

「君は心配しなくて良いから・・・俺の方から会って話すから・・・  
それに叔父さんの事色々調べさせてもらってね、色々気掛かりもあってね・・・」

「何かあるのですか？」

「それはハッキリしてから君に話すよ」

「はい」

「じゃあ会社に行くか．．．。君は仕事もテキパキ出来て、非常に優秀な社員だよ」

そう言つて、裕英さんがウィンクした。

「社内でセクハラはやめて下さいね!!」

「楽しみなの。それに愛情表現だよ．．．」

またいたずらっ子な、意地悪そうな顔にふと変わった。

「他の社員の人の視線が気に掛かるし、私．．．恥ずかしいです」

「みんな側近中の側近だから大丈夫!!」

「もうっ」

．．．このイタズラ好きな、ちよつと意地悪な性格は直らなそうだね。

フツとため息をつく真里奈であった。

(第4話 続く)

#### 第4話 身勝手な女 有里亜

今日は会社の合同朝礼・・・。

大きなホールにズラリと本社従業員530名が部署事に整然と並び・・・。  
裕英さんが壇上に上がり、真剣な顔で挨拶し始めた。

「・・・こうやってみると、裕英さんって恰好良い・・・素敵だな。」

家の顔と全然違う・・・家だと結構ユーモラスで明るくて、楽しくて・・・。

初めて見た時には凄く恐そうな人って思ったけれど・・・。  
話して見ると、イタズラ好きで、時々少年っぽい顔もするし、ちょいHな所もあるけど・・・とても頼れる素敵な人だわ・・・。

「・・・でありますので、社員一同力を合わせて今後も頑張ってくださいましょう・・・。」

それから最後に、私事ではありますが・・・。第一秘書課の 大門寺 真里奈さんと婚約する事になりました」

「んっ？ ええっ？ ええええーっ!!」

裕英さんのいきなりの婚約発表演説に、真里奈は啞然として固まってしまった。

社員からの『おおおーっ』と言う歓声と、拍手の渦・・・。

朝の合同朝礼は物凄く盛り上がって・・・。  
それからチョコチョコと、今日は何かにつけ小用で秘書課にやって

来るやじ馬社員の多かつた事．．．。

「社長！！いきなり朝礼であんな事．．．驚くじゃありませんか」  
腰に手をおいて、社長デスクの前に仁王立ちする真里奈。

「君に逃げられないように、釘を刺しておいたの」  
また意地悪そうに笑みを湛えながら、書類に目をやりながら、サラリと受け流す裕英。

「逃げませんよー！！」  
ブンと拗ねる。

「それに他の社員が君にアプローチしないようにさせておかないと．．．」

「モテませんからー！！」

「君は鈍いねー。君を観察しているとアプローチしてくる社員の多かつた事．．．」  
書類から目を離し、ちょっと恨みがましい目で真里奈を見つめる。

「えっ？」

キョトンとした顔の真里奈。

「飲み会に誘われたり、何かやたらと声かけられたり、今まで多くなかった？」

「そういえば．．．」

「今まで冷や冷やしたけど、アツサリ断ってたから．．．。アプロ

「チした社員の方も、真里奈に断られてラッキーだったよ。もし真里奈がOKしてたら、支社送りになる所だったかもな．．．」

「社長の権限を、そんな個人的な都合の為に使うなんて！！横暴すぎますよ！！それに．．．会社が終ったら家事が待ってるし．．．本当に忙しかったし．．．」

「これからは共働き夫婦だから、手伝うね。専業主婦になっても良いよ」

「．．．．．」  
「さげない優しさを感じる．．．」  
「本当は思いやり深い優しい人なんだ．．．今はその事が凄く分るわ．．．」

「両立が難しくなったら、考えますね。この仕事結構楽しいので、まだ頑張りたいなと．．．」

「働き者だね」

「叔父の会社の時は、今までお世話になった分を少しでもお返ししたいと思って、給料を頂いて無かったので、一生懸命働いてお給料をいただけるのも喜びって言うか、嬉しくて．．．」

「本当に真里奈って素晴らしい子だね」

「そう言つて、裕英がギュッと抱きついた。」

「ちよっ．．．社長！！会社なんですから止めて下さい！！人が来たら．．．」

「社長室はいきなり誰も入って来ないし、そんな慌てなくても大丈夫だって！！」

そう言っていきなり後ろから抱きついてきて、胸をむぎゅーつと触られた。

「きゃーっ!! 裕英さんって!! エロ社長だったのですね」  
その大胆な行動に、啞然呆然とする真里奈。

「君だけ専属のね!!」

「仕事に戻ります!!」  
慌てて社長室を出て行く真里奈。

「本当に可愛いし、からかい甲斐があるな・・・」  
真里奈の後ろ姿を見てクスリと微笑む裕英。

夕方5時に仕事を終え、帰り支度をして今日の晩ご飯のリクエストを聞くのが日課・・・。

コンコン・・・とドアをノックして、社長室に入ると、難しそうな顔で書類とにらめっこの裕英が居た。  
真里奈の顔を見ると、険しい顔が一転して、ニコッ!と笑顔に変わる・・・。

「社長・・・今日の晩ご飯は、和でいいですか?」

「社長じゃなくて名前で呼んでよ」

「裕英さん!今日は和で良いですか?」

「うん。楽しみだな・・・。仕事と家事とやらせてわるいね」

「気にしないで下さいね。 大門寺家では比にならないぐらい働かされて、大変でしたから．．．。」  
「楽勝って言うか、このぐらい動かないと体が鈍って調子が悪くなっちゃうので．．．。」

そう言ったらちよつと悲しそうに顔が曇った．．．。

「そんな顔しないで！！ 私、今とっても幸せですから」

「真里奈の事、一生笑顔でいられるように努力して、大切にすることをね」

「無理しないで、そのままの自然体のあなたで居て下さいね。それが一番嬉しいから．．．。」

あ．．．でも、エロ社長はやめてよね」

「それは止められないかも．．．。」

「もつっ！ じゃあまたあとでね」

「あ．．．待って！！」

そう言つて、社長デスクから立ち上がつて、真里奈をギュッと抱きしめて優しくキスをした。

「愛してる」

「私も大好きです」

笑顔でお互いに手を降つて別れた。

\* \* \* \* \*

家に帰って晩ご飯の支度をしていたらインターホンが鳴った。

「あら？ 裕英さんもう帰って来たの？」

カメラを見たら従姉妹の 有里亜だった。

ドアをガチャリと開けたら、ズカズカと入って来て、勝手に家に入り込んできた。

「有里亜……」

「真里奈！！ 父から聞いたわよ。 こちらの社長と婚約しておきながら、融資は断られたって！！ この恩知らず！！」  
半ヒステリックになって、勝手に喚きまくる有里亜。

「だって、叔父さんの会社どう考えても持ち直せる状況じゃないでしょう……。」  
その代わり、従業員の就職斡旋と、大門寺家の生活費の援助を下さると言っただけ……」

「何であなたが社長夫人で、私が乞食みたいにそのあなたから援助受けなきゃいけないのよ！！」

「なによその指輪！！あなたが身代わりにならなかつたら、それは私の物だったんだから！！」

有里亜が真里奈の指から指輪を取ろうと、飛びかかってきた。

「やめてっ！！」

丁度、有里亜を突き飛ばした時に、裕英さんが帰ってきて、いきなり玄関ドアが開いた。

「どうしたの？ 君、大丈夫？」

真里奈と有里亜を見比べながら、とても驚いた表情の裕英。

「私、大門寺家の娘の 有里亜です。真里奈にいきなり突き飛ばされて・・・」

上目遣いでカワイコぶって、急にしおらしくなる。

「有里亜・・・」

青ざめる真里奈。

「本当は私が婚約者としてこの家に行くはずだったのに、真里奈が無理矢理身代わりになると言い出して、ここに押しかけて・・・」

この子は、樫乃原さんが思ってる様な純真な子じゃありませんから・・・。私から婚約者を奪って・・・」

あまりにもでたらめな事を並べ立てる有里亜に啞然としてしまった何も言えなかった。

ふと見ると、裕英さんが驚いた顔をして真里奈をじっと見ていた。その目が突き刺さった・・・。

絶えられなくなって、真里奈は家を飛びだした・・・。

(第5話に続く)

## 第5話 65点の真里奈

真里奈は隅田川沿いの遊歩道で、柵に持たれながらジーツと流れる川を見ていた。

私の好きな場所．．．。

家族で良く一緒に出かけた．．．。

小石を見付けてポチョンと川に投げ入れた。

時々水上バスや、屋形船が目の前を通り過ぎていく。

船上に乗って、回りの風景を楽しむ人の笑顔が眩しい．．．。

日が暮れ始めて、街燈に明かりが灯り．．．辺りがだんだん薄暗くなり始めていた。

涙が幾重にも流れた頬に、風が当たり、ひんやりする。

「おとうさん．．．おかあさん．．．ヒデくん．．．おじいちゃん．．．」

あの日、私もみんなと一緒に居たかったよ．．．。  
独りぼつちはすごく淋しい．．．。

風に頬を撫でられて、涙が乾いたかなと思ったのに．．．大粒の涙があとからあとからまた溢れてきて、薄暗くなって、川の向こうのビル群の煌めくイルミネーションがぼんやりとぼやけて見えなくなつた。

その時だった．．．。

いきなり後ろから大柄の男性が、ガバツと抱きついてきて、恐怖心で背中が凍りついた。

「きゃああああーっ!!」

自分の持てるだけの、ありったけの力を込めて腹部に肘鉄を食らわし、足の踵を思い切り後ろに振り上げて、相手の拗ねを蹴り上げた。

「あいてーっ」

その声に聞き覚えがあつて振り返ったら、裕英だった。

「裕英さん!!」

「真里奈・・・良かった・・・」  
腹と足を押さえながら、苦笑いする裕英。

「じっ・・・ごめんなさい。」

「いや・・・いきなり抱きついたから驚いたよね。  
探し回つて、やっと見つけて嬉しくて、ついつい夢中で抱きついてしまった・・・」

「何で？　ここが分かったの？」

「携帯のナビ・・・。君が携帯を持って行ってくれて良かったよ・・・」

そう言われて、エプロンのポケットに携帯を入れていたのを思い出した。

お互いに、何かの時の為にとナビ登録し合っていたのを思い出した。

「その格好で、随分遠くまで行ってしまったから驚いたよ」

「ここはね、家族で良く来た場所だから……。凄く来たくなくなってしまったの……」

「そうだったのか……」

裕英が紙のバッグから靴を取りだして、真里奈の前に並べた。

「ほら、履きかえろよ」

「あ……」

足を良く見たら、サンダル履きで、右足は真里奈の右足サンダル、左足は裕英の大きな右足サンダルだった。

「エプロン姿に、右足同士で良くここまで歩けたね」

「嫌だ私ったら……」

裕英は優しく両手で真里奈の頬を包み込み、そつと親指で涙をぬぐった。

「君を泣かせないって心に決めたのに、悲しい思いさせちゃってごめんな」

「ううん。家を飛びだして、心配かけちゃってごめんなさい」

裕英はふわりと優しく抱きしめて、自分の頬を真里奈の頬にくっつけて言った。

「真里奈の事信じてるし、俺が愛してるのは真里奈だけだから……」

「私ね、自信が無くて．．．きつと信じてもらえないって思って．．．  
今までずっと彼女に泣かされてきたから．．．」

「俺が信じてるのは真里奈だけだし、安心してよ」

「中2の時、家事のもらい火で家が全焼して、私1人残されて、大  
門寺家に引き取られて．．．」

その時からずっと遠慮して生きて行かなくてはいけなくて．．．  
高校生の時、好きな先輩から告白された時も．．．彼女があらぬ噂  
を立てて、結局去って行かれたし．．．

その後も、好きな人が出来るといつも彼女に妨害されて、引き裂か  
れて、恋をする事も出来なかった．．．

親友と呼べるお友達が出来ると、いつも彼女が意地悪をして、結局  
去られてしまつて．．．

お友達を作る事も疲れてしまつて．．．気がついたらお友達と呼べ  
る人がいなかったし．．．

成績もね、いい点数をとると、彼女とおばさんの機嫌が悪くて色々  
と意地悪をされるから、いつもわざと間違つてほしい65点をと  
るようにしてたの．．．

本当は勉強が好きだったし、一生懸命頑張つて、100点をとりた  
かった．．．

今回もね、また裕英さんをとられちゃうのかなって不安になつて．．  
。

欲しい物は何でも持つて行かれて、私も遠慮してたから．．．

初め裕英さんの所に行かされた時、凄く辛かったの。

どんな人かも分からないし、何をされるのかも分からないし．．．

本当に辛かったし、天国のお父さんに申し訳ないなって思っ  
て．．．  
そんな私の気持ちも知らないで．．．。  
裕英さんが素敵な人だつて分かった途端に押しかけてきて．．．と  
ても悔しかったし．．．お母様の形見の指輪までとりあげようと  
して、頭に血が上つてつい突き飛ばしちゃった」

「彼女の方が先にきつい事をしたんだろ．．．突き飛ばされても仕  
方ないよ。」

可愛そうに．．．手．．．引つ掛かれて、血が出るし．．．」

「あ．．．ほんとうだ．．．。このぐらい大丈夫ですよ!!」

本当にごめんなさいね。裕英さんが信じてくれないって．．．勝手に  
に思つて．．．」

「これからは、俺の事、もっと信じてくれよ。もっと甘えて、いっ  
ぱい頼つていいんだよ。」

真里奈はもう独りぼっちじゃないんだから．．．。俺達、家族にな  
るんだよ。」

「嬉しい．．．家族が欲しかったし、誰かに寄り掛かりたくて、包  
み込んで欲しくて．．．。私、凄く淋しかったの．．．」

「それに、気丈に振る舞ってるけど本当は弱虫で、凄い恐がりだろ  
う?」

「え?」

「初めて会った時、凄く脅えて、俺の事、恐がってて．．．」

「あ．．．」

「凄く可愛い子だって思ったよ。可愛くて、愛しくて、たまらな  
かった．．．」

「恥ずかしいわ．．．」

「せつかく作ってくれた晩ご飯．．．食べに帰ろうよ」

「うん」

「真里奈．．．愛してる」

「私も．．．愛してます。もう家を飛び出したりしません」

「うん」

家までの道、一緒に手を繋いで帰った。

裕英の手は大きくて、凄く温かった。

家に帰って来て、一緒に夕食を食べてる時に真里奈が頬を染めて言  
った。

「裕英さん．．．私、こうやって一緒にご飯を食べてくれる大切な  
人が居てくれる事、帰る温かい家がある事．．．凄く嬉しいの。

さつきね、家を飛び出したけれど、何処にも帰る場所がなくて．．  
。淋しくて、悲しかった．．．」

「ここは俺と真里奈の家だから．．．」

「うん」

「裕英さん．．．ありがとうございます」

「えっ？」

「私．．．幸せ．．．」

「俺もありがとう．．．。真里奈が来てくれて凄く幸せ」

「そっだ．．．。有里亜はどうしたの？」

「俺が帰りなさいって追い返したよ。君を泣かせるような意地悪な子だし、もう家に入れなくていいから．．．」

「うん。私ももう懲りたし、出来るだけ関わりたくないなって思ったわ．．．」

「それからさ．．．叔父さんの事だけど．．．。真里奈が思ってる様な、いい人じゃないかもしれないよ」

「えっ？」

「色々調べたらさ、ちょっとって思う事が色々ポロポロ出て来てね．．．」

「もう叔父さんともあまり関わらない方が良くと思うんだ．．．」

「でも．．．私の事面倒見てくれて．．．」

「でも大門寺家でとても辛い思いしたでしょ？ それに、ずっと会社でタダ働きさせられて・・・」

「それは、面倒見てくれて、私にかかったお金を少しでもお返ししたいと思って・・・」

「うん・・・。その気持ちは分かるけど・・・。そこまですぐ恩返しする必要はないと思うよ」

「何かあるのですか？」

「色々と・・・分かった事があってね・・・。でも、真実を話したら君が傷つく思いをしないかと心配なんだ・・・」

「話して下さい」

「うん・・・」

(第6話に続く)

## 第6話 幸せの彼方に

話したら傷つく事って何だろう？

叔父さんの本当の姿って？？

恐くて不安になるけど．．．真実が知りたい．．．。

「裕英さん、話して下さい」

「真里奈．．．この先どんな時も、俺が守ってあげるし、俺を頼ってくれよ」

「はい」

．．．そして、叔父について色々話しを聞いた。

叔父は、派手好きで、世間の目を気にするような所もあるし、いざとなると気弱で．．．物事の考え方が短絡的で、思いつきで行動するような所もあった。

父は、祖父から信頼され、祖父が大きくした繊維関係の商社の専務として忙しく働いていた。

次期社長間違いなしと言われて、祖父も後を嗣がせたかったようだが、取引先の中堅紡績会社の娘であった母と熱烈な恋愛関係となり、一人娘だった母は家を継がなくてはいけなかった．．．。

それで父は婿となり、『錦織』の名を嗣ぐ事となり、紡績会社の社長となった。

真面目実直な父のお陰で、会社は業績もグングン伸びて潤っていると思っていた．．．。

家も結構裕福で、毎年夏・冬家族で海外旅行に出かけていたし、軽井沢に別荘もあったし……。

時々、大門家の家業を継いだ弟の叔父に資金援助もしていたようだ……。

母の父であるおじい（祖父）は、とても優しい心の広い人で、私も弟ヒデと、よく紡績工場に見学に行つて、色々おじいから、工場の話しを聞いたり、機械の説明を聞いたりした。

沢山の原綿の山々や、コンベアーで流れて行く原綿……。

引き伸ばした綿を巻く沢山の筒……。

生糸を機械で巻きあげる、機械音……。

おじいと、父の思い出……。

ヒデと手を繋いで工場によく遊びにいった……。

それからお菓子作りが得意で、優しい母……。

「君の伯父さんは、企業家としては今ひとつで、金使いも荒くてね、よく君の父親に金の無心に行つていたようだ。そして倒産寸前のがあつたんだが、それがすぐ持ち直した……。」

「え？」

「あの不幸な火事の事故の後……。錦織家の財産や会社はどうなつた？」

「叔父から聞いた話しでは、会社の方は大赤字で膨大な負債を抱え

てて、叔父が肩代わりして、それから同じ系列の紡績会社に吸収合併を持ちかけて、上手く処理してくれたそうです。

負債返却に、家・土地、全て処分しなくてはいけなかったそうで、何も残らなかったと・・・」

「それはとんでもない話なんだよ・・・」

「え？」

「君のおじいさんと、お父さんは、誠実で働き者で、会社経営は順調で、かなりの黒字だったんだ・・・。」

君にはかなりの莫大な財産が残されていたはずだった」

「ええっ」

「君はまだ中2だったから、何も分からなくて当り前だと思うよ。

会社はかなりの金額で、同じ系列会社に売られてしまったんだ。

私腹を肥やしたのは、君の叔父さん・・・。」

家や土地、その他全て、未成年者で相続できなかった君の代理後見人に叔父さんがなって、全て奪ってしまったんだ・・・。」

君がお世話になったんじゃないくて、叔父さん一家が君にお世話になったんだよ」

「そんなぁ・・・」

「それから・・・間もなく逮捕状が出ると思うけど・・・資金集めに躍起になってる叔父さんが、せっぱ詰まってしまうたんだろっね・・・。」

この間、叔父さんの会社でばや騒ぎがあって、火災保険目当ての放

火だったようだ．．．。  
その手口が、君の家の隣で出火した、付け火と全く同じだったそう  
だよ」

「じゃああの火事は．．．」

「叔父さんの仕業だったようだ．．．」

がく然として力が抜けてへたり込んでしまった．．．。  
感謝し続けていた人が、私の大切な家族を奪った殺人者だったとは  
．．．。

「真里奈．．．凄く辛いと思う．．．だけど、いつも側に俺がいる  
と言つ事を忘れないで．．．。」

君の辛い心の悲しみは、俺が沢山愛して、うめてあげるから．．．」

「裕英さん．．．」

あの日全て燃えてしまつて、家族写真も何もかも残らなかった．．．  
。残ってるのは沢山の家族との思い出の記憶だけ．．．。  
失ってしまった物は計り知れない．．．。

でも．．．私は生きてるし、愛してくれる人が側にいる。  
この先、この愛する人と沢山の未来が待っていると思うし、きっと  
楽しい思い出を沢山作っていける。

それに、心の中に、父、母、弟、おじいとの記憶は永遠に残る．．．  
。

・・・それから叔父は逮捕され、叔母と従姉妹の有里亜の行方は分からなくなつた・・・。

私は裕英さんと、裕英さんのお父様に御挨拶に行き、入籍し、結婚式を挙げ、新婚旅行に行き・・・。

それ以外にも、色々な場所に旅行に行ったり、出かけたリ・・・。

一緒に楽しんで、喜んで・・・幸せを分かち合つた。

\* \* \* \* \*

「なんか最近顔色悪いぞ・・・」

「裕英さん、赤ちゃん出来たみたい・・・」

微笑み合う二人・・・。

万華鏡つて知ってる？

筒の中に鏡を張って合わせ鏡にして

クルリと回すと

美しい硝子玉やビーズが素敵な模様を描くの・・・。

光に翳して、グルグル回すと夢のよう・・・。

お金持ちで何不自由ない暮らしの大門寺有里亜・・・。

両親がいなくて貧乏な暮らしの錦織真里奈・・・。

同じ年の従姉妹同士だからか、二人は良く似ていた・・・。

そして万華鏡のようにクルリと回して入れ替わった・・・。

意地悪で、我が儘な大門寺有里亜は・・・父親が逮捕され、世間から身を隠す、貧しく苦勞の人生を送り・・・。

優しくて、働き者の錦織真里奈は・・・幸せな結婚をして、優しい夫とかわいい子供達と毎日笑顔の日々を送って・・・。

キラキラ虹色に輝く未来が・・・。

(・・・完・・・)

## 第6話 幸せの彼方に（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。 (^ ^ )  
( ^ ^ )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4527u/>

---

万華鏡

2011年9月8日14時36分発行